

# 婦人と子ども

第十二卷第十一號

## 新たに考へよ

(今日の幼稚園教育不振の主因)

他の教育の進歩、少くも其の活動のめざましさに對して、幼稚園教育の何となく不振にして、おくれたる觀あるは、數へればいろ／＼の理由も事情もあることであろう。しかし、外からの理由、他に訴ふべき不足のかす／＼を措いて、直に之れが第一主因を突けば、責は即ち今日の幼稚園教育そのものにある。新に考へるといふことなくて、其の日／＼昨日を繰りかへしてのみ居る傳襲的幼稚園教育にある。

春子は子供が好きであつた。學校を出てから、保姆にでもなつて見ようといふことになつた——別に資格免狀もいらなかつた。私は何も知らないのですがと擢る／＼言つたら、暫くたてば雜作もない、直ぐ覺えられると言つて呉れた。實際、保姆なんか誰れにでも出来ること、豫て思つて居た春子はそれで愈々安心した。——幼稚園の先生は面白いものであつた。可愛らしい子供達が先生々々と言つて来る。幼児の方からも珍らしい此の新らしい若い先生は、すぐ幼稚園中の人氣者になつ

た。春子は宛然花園の中に居る様な心持がした。胡蝶の國に住むような心持がした。遊んで遊んで疲れはする。併し心に何の苦もなかつた。——花園の花には泣くのがあつた。怒るのがあつた。すねるのがあつた。胡蝶がなかく悪戯をする。随分と不行儀をする。春子は一寸驚いた。しかし若い先生の教育上の自信ほど強いものはない。此の自信の前には總てのことが易々と解決せられた。一々立派に處置せられた。時にはうまく行かないことがあつても、それは幼児の方に罪があつた。その爲に春子の自信が傷けらるゝ様のことは決してなかつた。——斯くて一年程経た。新しい先生がそう新しい方でもなくなつて來た。大分幼稚園教育の経験が積んだものゝように人からも見られ出した。自分でも亦そう思ひたかつた。處が不思議であつた。甚だ奇妙であつた。花園にもやがかゝつて來た。胡蝶の國が夕闇に包まれて來た。

自信の提灯が消えかゝつて來た。一々のことが危くなつて來た。小さなことが分らなくなつて來た。昨日まで平氣で歩いて居た處が懼しさで一ぱいになつて來た。その爲に一時は立ちすくむ様な思ひがした。併しそうもして居られなかつた。闇の中で幼児等が先生々と呼んで居る。躊躇して居る自分の背を推すように園長がいろ／＼のことを命ずる。どうしていゝのか分らなかつた。きのふまで面白い處であつた幼稚園は苦しい處に變つて仕舞つた。——春子は之れではならぬと思つた。氣をとり直して立ち上つた。そうして先づ第一に自分の苦しさを先輩の同僚に打ちあけた。疑問の條々を擧げて教を乞はうとした。處が誰れも満足と與へて呉れるものはなかつた。しかのみならず、先輩同僚の答へが少からず若い春子を驚かした。即ち若い夏子さんは快活に笑つて、「私そんな六づかしいこと知らないわ」と許り、まるで對手にな

らない。「それよりか、あなたの組の紅子さん、ほんとに可愛い、子ねえ。今日もあの友染を着て来たでしよう。私可愛い、から會集の時あの子ばかり見て居たの。」春子は仕方ないから、「そう」と言つて別れた。そして次に秋子さんに質問をした。秋子さんはいつもの通りの陰氣な顔をして、「あなた大變研究して居らつしやるのねえ。およしなさいよ。私なんかそんなこと考へたこともありません。つまらないんですもの。今日もねえ從順の徳のお話をしてやつてたら大勢あくびをするんですよ。私もねえ今日は気分が悪くつて進まないから、いゝ加減に話して居たんですけれどねえ。それだつてお話を聞きながらあくびするなんて、いくら子供だつて餘りでしょう。だからねえ七人許り立たしてやりました。幼稚園なんてつくつくいやになつて仕舞つた。春子は流石に何とか言うとした。しかし此の人のヒステリー性は豫て知つて

居るから黙つてやめた。春子は誰れに尋ねても仕方ないと思つて、家に歸つて本を讀んで見た。先づ學校で習つた教育の教科書をあけて見た。幼稚園は獨逸の國のフレイベルといふ人が始めたのだと書いてあつた。恩物といふものを用ふと書いてあつた。そして欄外に自分の鉛筆で毬だの立體だの恩物の種類が記入してあつた。終りに、學齡前の兒童を教育するに甚だ必要な處なりと書いてあつた。春子は失望してそのまゝ、本箱の中へ入れて仕舞つた。——とうとう春子は冬先生に質問をして見た。冬先生のお答へは簡單で明瞭であつた。「考へたつて分るものじやありません。私のする通りして居れば慣れますよ。」

この後の春子の歴史は、時が経たといふ他に何の内容もないから略す。たゞ有り難いところには内容のない『時』が三年と過ぎ五年と過ぎて居る間に、春子はいつの間にか熟練な保姆になつた。上手な

保母になつた。而して嘗て面白い處であつた幼稚園、次に苦しい處であつた幼稚園は、今の春子には苦しい處でも、別段面白い處でもなくなつて、たゞ吞氣な處になつた。

疑問は解かれたのではない。たゞ其のまゝに、いつの間にもやら忘られて仕舞つて居たのである。

そして遂には、初から疑問の無いことの様になつて仕舞つて居るのである。即ち意味を知らない形式になつて仕舞つて居るのである。自ら意味を知らないことをさへ氣にしない様になつて仕舞つて居るのである、即ち幼稚園教育方法が器械化せられて仕舞つたのである。之れが即ち今日の幼稚園教育不振の主因である。

意味を知らず、之れを考へない仕事に進歩のあろう筈はない。進歩は兎に角、生命のあろう筈がない。生命のない仕事に眞の成績のあろう筈がない。

い。

此のまゝに形ばかりをどう整へた處で仕方がない。外の事情に基く擴張や、所謂改良や進歩があつた處で仕方がない。要はもう一度考へなほすにある。毎日して居る事を一つ一つに就て、一つ残らず自分で考へをなして見るにある。何でもなれと思つてして居る方法、何の氣も付ずに用ゐて居る材料一々を意味深く考へて見るにある。考へて解決がつくか否かは先づ第二の問題として、何しろ、先づ考へて見るにある。換言すれば疑を起して見るにある。而して、その疑を堅固に持ち續けるにある。之れが今日の幼稚園教育刷新の第一着手である。

幼稚園教育は簡單なことだといはれて居る。局外者がそう見做す許りでなく、當事者がそう思つて居る。しかし事實果してそうであらうか。い、

加減に淺く過して置けば何でも簡單である。綿密に深く究むれば何事でも簡單でない。實際、疑へば分らないこと許りである。考へれば次へくと疑ひが出る。それを疑ひもせず考へもせず、自分のして居る傳襲的、器械的容易さのみ安んじて居るのは、夢に千里を近しと見るの氣樂さである。疑へ々々。考へよ々々々。そこに今日の幼稚園教育が初めて活きて動き出す。正直に大膽に自分

## 子供の盗み

(フレイベル會十月例會講話)

盗みが子供に於て見らるゝのは、決して珍しいことではない。尤もこれには習癖として現はるゝものと、只一時の現象として起るものがあつて

に分らないことは何處までも自分で考へよ。即ち器械化せられた今日の幼稚園教育を一旦疑つて見よ。そこに初めて生命ある幼稚園教育が生まれて來る。即ち今日の幼稚園教育の振作に第一着に重要なものは、解決でなくて疑問である。傳襲的幼稚園教育法を吾れ人共に、あらためて考へなほして見ることにある。

文學士 寺田 精 一

其點は普通の成人に於て見らるゝ場合と更に異るところがない。けれども子供は普通の成人とは、其心身の發達の程度及び四圍の關係が色々と相違して居る。従つて普通の成人に於ける盗みと、此